

書評

新井達太 編

心臓弁膜症の外科 (第3版)

東京女子医科大学東医療センター心臓血管外科教授

中野清治

本書は「心臓弁膜症」に関し、解剖、循環動態、診断、適応、手術、術後管理、遠隔成績にいたるまでをすべて網羅しているものである。そして今回の改訂で、手術手技がさらに具体的にわかりやすく解説された。また、心エコー、虚血性僧帽弁閉鎖不全、MICSなどに関する項目が充実した。

心エコーに関しては外科医ではなく、循環器内科医である尾辻豊教授が執筆されている点が注目される。心エコーを知り尽くすと同時に、外科医の立場もよく理解された医師として、外科医とは一味違う視点から弁膜症が語られている。

虚血性僧帽弁閉鎖不全の項目は、大幅に増設され6人の外科医によって執筆されている。従来、この項目は虚血性心疾患との境界領域であり、弁膜症においてはあまり多くのページが設けられてこ

なかった。今回の改訂により非常に充実したものとなったことは喜ばしく、同様に境界領域である拡張型心筋症と閉塞性肥大型心筋症による僧帽弁閉鎖不全に関する項目が加わればさらに充実するものと思われる。次回の改訂に期待したい。

人工弁の項目は過去の弁に関する詳細な記載が少し減り、その分新しい人工弁に関する記載が増えた。特に経皮的生体弁移植術と弁形成術にまで言及している点は斬新である。一方、古い弁に関する記載が依然充実している点も重要である。人工弁に関しては、歴史が重要であり、「温故知新」という言葉がまさに当てはまる。本書では過去から、未来にわたり、人工弁の変遷がよく示されている。現在市販されていない人工弁に関しても詳しい記載がされている点もありがたい。これらの弁を現在

なお使用されている患者さんが多くいらっしゃるのが現状だからである。このように多くのページを設け、過去に使用した人工弁に関しても詳しく記載することは臨床的にも大変意義深い。

もう一つの本書の特徴は、一つのテーマに対して複数の外科医による執筆が行われている点である。特に、僧帽弁形成術、大動脈弁基部に対する手術、虚血性僧帽弁閉鎖不全に対する手術に関しては、多くの外科医が、それぞれの考えに基づいた、手術手技を供覧している。各自の豊富な経験に基づいたコツ、そしてともすれば落とし穴がわかり、非常に学ぶ点が多い。各自に与えられたテーマは少しずつ違うが、重複している部分も多く、このことが作者の違うartを見るようでさらに非常に興味深い。

本書は心臓血管外科医にとって必要な基礎知識から具体的な技術まですべてがわかる聖書といえるものである。まさに座右の書として手に取ることの多い一冊となることと思う。

〔B5 頁680 2007年 定価
29,400円(本体28,000円+税5%) 医学書院刊〕